

# 定住者と、落ちていく者と

## ——『明暗』における小林登場の意味——

朴 裕 河

Those who settle and those who fall:  
The Meaning of the appearance of Kobayashi in *Meian* (*Light and Dark*)

Yuha PARK

### Abstract

Kobayashi in *Meian* (*Light and Dark*) is depicted as a person on the verge of his fate: “falling” in Korea. Kobayashi, upon attaching himself to Tsuda and his wife O-Nobu, can be seen as a person who behaves unpleasantly. However, this behavior was also an appeal by a poor person who had not created a place for himself to live in Japan and did not want to go to a strange land. Both Tsuda and O-Nobu are generally cold to him. As the word suggests, a “colony” cannot be formed without “colonists.” *Meian* (*Light and Dark*) is a story that critically depicts “settlers” as people who ought to become colonists and be sent out, but who are satisfied with not moving.

## 1. 明・暗の時代

明暗は、長い間夫婦物語として読まれてきました。そこに結婚前に付き合っていた女性が出てきて漱石が多く扱ってきた男二人と女一人の構図ではない、男一人に女二人の構図が展開されています。漱石が生涯追及してきた「関係」物語の変形としてもとても興味深い物語となっていることも事実です。

しかし、この小説には実はもう一人の男——津田の友人である小林が、作品の割合ははじめから登場し、後半の温泉場の場面直前まで繰り返し登場しています。そしてこのことは、実は『明暗』を読むにおいて欠かせない重要な構図といわなければなりません。

『明暗』というタイトルは、大きくは中流階級の一人として、裕福な家の娘を奥さんにして、親にも援助してもらいながら悠々と生きてきた津田を、金と病気——生きるにおいて根本条件であるはずの道具の欠如といった事態を目の前にした——根底から揺さぶりつつ、しかも家庭の破綻もありうるという意味で津田の『明』から未知の『暗』への過

程をたどる物語と見る事がまずできます。同時に、たとえお金と健康に脅かされつつも津田は友人小林に比べれば『明』の世界に属しているという意味で津田の一見「明」の世界と、小林の『暗』から未知の「暗」の世界の対比を描いているともいえるでしょう。何しろ、小林は 先のことが分からないような未知の世界—朝鮮へ「落ちて」ゆく運命にある者として描かれます。

そこで本稿では、『明暗』を小林と津田・お延に焦点を合わせ、そうした構図設定の意味を探ってみたいと思います。

## 2. 津田と小林—不安を抱きしめて

津田は、病院からの帰り道に「周囲のものは彼の存在にすら気が付かずにみんな済ましてゐた」(一、6)と感じています。それは、後に小林が自己存在を社会の中に認めてもらえない苦痛を訴える場面と照応しています。津田は、小林の苦痛を理解する一つの契機を得たといえるでしょう。そしてそれこそが究極の「暗」の世界となるはずなのです。「今現

に何んな変が此肉体のうちに起こりつゝあるかも知れない。さうして自分は全く知らずにゐる。恐ろしい事だ」(二、7)と感じていることもその複線といえます。先のことがわからないことに対する恐怖は、「朝鮮」へ「落ちて」ゆくことになる小林も共有するものともいえるでしょう。

『明暗』が書かれていた時代は、日本が第一次世界大戦に参入していた時代でもあります。この大戦は一九一四年に始まって一九一八年に終了したのだから、『明暗』の時代背景は戦争の時代、ともいえます。日本はドイツに宣戦布告することで参戦し、南洋群島にまで攻めていったのですが、それは勝利する場合山東半島を手に入れることができるからでした。いうまでもなく、それは、台湾と朝鮮を植民地にした大日本帝国の、次の植民地となるはずの場所でした。

そうした時期、『明暗』が書かれた同じ年——一九一六年に、大阪朝日新聞は河上肇の『貧乏物語』を掲載しています。『明暗』は五月二十六日から十二月十四日まで連載されましたが、『貧乏物語』の方はすこし遅れて、九月一日から十二月二十六日まで連載されました。漱石がこれを読んだと見るのは無理な推定ではないでしょう。

つまり、この時代は国外では戦争で国力を誇り、国内では貧しい人が多くそのことが社会問題として意識されていた時代でした。『明暗』にはさりげなく「乞食」(十三、41)が登場していて、こうした時代の断面がしっかりと描かれています。さらに、道端の「乞食」ではないにしても、友人の古い外套を譲り受けて、住み慣れた地を離れていく、小林のような人物が登場するのはまさにこうした時代の反映だったに違いありません。

漱石の修善寺での療養の時見舞いに来た石川啄木が貧乏と病気の末にわずか二十六才で亡くなったのは、『明暗』が書かれる四年前の一九一二年でした。「働けど働けど、……」の歌が収録された『一握の砂』が出たのは一九一〇年で、このときはまさに啄木が朝鮮合併に対する気持ちをも残した年でもありました。貧乏で病氣をも治療できずにわずか26歳で亡くなってしまった啄木が朝鮮に思いを寄せたのは、「弱き者」への共感だったのかもしれない。

実は啄木は漱石の修善寺にも見舞いに来ていて、漱石は啄木の葬式にも参列しています。啄木とのこ

うした付き合いは、漱石が「貧しさ」について関心を持ち始めたきっかけになったとも考えられます。

実際に、『明暗』はすでに多くの論者が指摘するように「お金」をめぐる話であり、それを支えるように、「質屋」に関する言及も少なくありません。近代的銀行——がまだ機能しない時、だからこそ自己の生存を知り合い——人的関係に頼るほかない時代の物語とも言えるでしょう。そして『明暗』に小林という人物が登場するのはそうした背景があつてのことと考えられるのです。

### 3. 小林と朝鮮

小林が朝鮮へ行くのは、貧しいからです。つまり、植民地は、日本の中に居場所を見出せなかった人が移動していくような場所として機能していました。いわば、その地において生きていけずに「外部」に押し出されることになる日本国民を描いた話とも言えるでしょう。

津田には足りない分を仕送ってくれる親と、家を持っていて、そこを仕切ってくれる奥さん、そして身の回りの世話をしてくれる下女までがいます。しかし小林には親も家も奥さんもなく、養うべき妹がいるだけです。そうした所有の有無が登場人物の明・暗を分けているのは言うまでもありません。

同世代でありながら、小林に奥さんがいないのは、家と仕事を持っていないことが大きく影響するはずです。時代は見合いの時代で、条件とは財産など、所有の有無を見ることでもあるからです。小林の立場は、若者たちが仕事を得られずに、恋愛・結婚・家を諦めているような現代の若者とあまり変わりません。つまり経済的条件が人的資産も保障するような時代を小林は生きているのです。

そして、追われていくように小林は朝鮮を選択します。しかしそれは、必ずしも小林自ら願つてのことではありません。また、必ずしも明るい未来を予想してのことでもありません。次の例文を見てください。

「実はこの着物で近々都落をやるんだよ。朝鮮へ落ちるんだよ」(三十六、114)

「斯う苦しくつちや、いくら東京に辛防してゐたつて、仕方がないからね。未来のない所に住

んでるのは実際厭だよ」(三十六、115)

「要するに僕なんぞは、生涯漂流して歩く運命を有って生れて来た人間かも知れないよ。何うしても落ち付けないんだもの。たとひ自分が落ち付く気でも、世間が落ち付かせて呉れないから残酷だよ。駈落者になるより外に仕方がないぢやないか」

「落ち付けないのは君ばかりぢやない。僕だつてちつとも落付いてゐられやしない」

「勿体ない事をいふな。君の落ち付けないのは贅沢だからさ。僕のは死ぬ迄麴麴を追懸けて歩かなければならぬんだから苦しいんだ。」

「然し落ち付けないのは、現代人の一般の特色だからね。苦しいのは君ばかりぢやないよ」

小林は津田の言葉から何等の慰藉を受ける気色もなかつた。(三十六、115)

津田もまた、病気とお金に困っていて、しかも奥さんとの関係が安定的なわけではありません。しかも後半の展開によっては津田もまた、『それから』の代助のように実存的な不安の場に追い出されることもありえます。ここで津田の境遇を小林が「贅沢」といって取り合わないのは、それだけ小林の境遇が切実であることを示すものと見ていいでしょう。そしてそうした視線は津田が「土方や人足をてんから人間扱ひにしない積」(三十五、111)といった、判断があつたのであります。

小林が探偵に監視されているといった自覚をしていることもこのことと関係があります。津田にとって小林は「無闇に上流社会の悪口をい」う人で、そのために「社会主義者に間違へられる」ので「少し用心」(三十五、110)すべき存在なのです。

しかし小林は、自分のほうが「善良なる細民の同情者」であり、むしろ「乙に上品振って取り繕ってる君たちの方が余つ程の悪者」で、「どっちが警察に引っ張られて然るべきだか能く考えて」みるべき存在と考えています。

津田は、ドストエフスキに言及しながら下層社会への思いを語る小林を泣かせるものがただ酒であるか、叔父であるかを疑い、(三十六、112)小林の

涙をただ迷惑さうに眺めるような友人でしかありません。

小林が貧乏で、「社会主義者」とみなされて警戒されうるという設定は、一九一六年の日本社会が誰を排除しつつあつたかを垣間見せてくれています。それは、小林を冷ややかに眺める、日本を離れないで住む、「生涯漂流して歩く運命を有って生まれて来た人間」ではない定住者たちであります。小林が、「たとひ自分が落ち付く気でも、世間が落ち付かせて呉れないから残酷」と訴えるのは、自分を追い出す社会構造を語っていて、そこでの「運命」とはあくまでも社会的な運命でしかありません。

小林が何度も「軽蔑」される自分を意識し、口にするのはこうした関係を語っています。小林は確かに相手を不愉快にさせる行動を取ったりしますが、津田をはじめとする定住者たちが小林を「軽蔑」するのは、社会的差別の現場でもあるはずで、二人の対話を見ましょう。

「実を云ふと、僕は行きたくもないんだがなあ」

「藤井の叔父が是非行けどでも云ふのかい」

「なにさうでもないんだ」

「ぢや止したら可いぢやないか」

津田の言葉は誰にでも解り切つた理屈な丈に、同情に飢えてゐるような相手の気分を残酷に射貫いたと一般であつた。数歩の後、小林は突然津田の方を向いた。

「津田君、僕は淋しいよ」

津田は返事をしなかつた。

(略)

「僕矢つ張り行くよ。何うしても行つた方が可いんだからね」

「ぢや行くさ」

「うん、行くとも。斯んな所にゐて、みんなに馬鹿にされるより、朝鮮か台湾に行つた方がよっぽど増しだ」

彼の語気は癩走つてゐた。津田は急に穏やかな調子を使ふ必要を感じた。(三十七、117-118)

小林が「実を云ふと、僕は行きたくもない」(三十七、117)と話すのは、津田が察するとおりなんらかの同情を期待してのことです。しかし津田はそれに答えていません。「淋しい」と小林の

言葉にも津田は「返事をしな」（三十七、117）いのです。結局小林に「斯んな所にあて、みんなに馬鹿にされるより、朝鮮か台湾に行つた方がよっぽど増し」（同）と言わせ、小林の語気の変化を感じ取ってからも、止めるのではなく「何処へ行つたつて立派に成功出来る」（三十七、118）と話します。そこで、送別会を開くと話しますが「今度は小林の方が可い返事をしない」状況を作るのです。

#### 4. 定住の条件

小林は、なぜ奥さんがいないのかというお延の質問に次のように答えています。

「貰ひたくつても貰へないんです」

「何故」

「来て呉れ手がなければ、自然貰へない訳ぢやありませんか」（八十二、274）

「僕だつて朝鮮三界迄駆落のお供をして呉れるような、実のある女があれば、斯んな変な人間にならないで、済んだかも知れませんよ。実を云ふと、僕には細君ばかりぢやないんです。何にもないんです。親も友達もないんです。つまり世の中がないんですね。もつと広く云えば人間がないんだとも云はれるでせうが」

（八十二、275）

こう話す小林をお延は「生まれて初めての人に会ったような気がした」と感じています。それだけ小林はこのお延にとって遠い場所にいる人物なのです。

小林は妹を置いていく理由を、日本が「安全」で、「殺される危険が少ない」（八十二、276）からだとしています。小林が、そうした危険な場所に行くことになるのはなぜでしょうか。小林はお延との対話で清子のことを話しそうになっては、話題を変えて津田のことを話題にします。

「奥さん津田君が変つた例証として、是非あなたに聴かせなければならぬ事があるんですが、余りおびえてあつしやる様だから、それは後廻しにして、其反対の方、即ち津田君がちつとも変らない所を少し御参考迄にお話して置きますよ。是は厭でも私の方では是非奥さんに

聴いて頂きたいのです。一何うです聴いて下さいますか。」

お延は冷淡に「何うともあなたの御随意に」と答へた。小林は「有難い」と云つて笑つた。

「僕は昔から津田君に軽蔑されてゐました。今でも津田君に軽蔑されてゐます。先刻からいふ通り、津田君は大変変りましたよ。けれども津田君の僕に対する軽蔑丈は昔も今も同様なのです。毫も変わらないのです。是丈はいくら伶俐な奥さんの感化力でも何うする訳にも行かないと見えますね。尤もあなた方から見たら、それが理の当然なんでせうけれどもね」

（略）

「いや別に變つて貰ひたいといふ意味ぢやありませんよ。其点について奥さんの御尽力を仰ぐ気は毛頭ないんだから、御安心なさい。実をいふと、僕は津田君にばかり軽蔑されてゐる人間ぢやないんです。誰にでも軽蔑されてゐる人間なんです。下らない女に迄軽蔑されてゐるんです。有体に云へば世の中全体が寄つてたかつて僕を軽蔑してゐるんです。」

（八十五、284 - 285）

そして、こうした言葉に対して「随分僻んでい」とのお延の言葉を受けて次のように答えています。

「え、僻んでるかも知れません。僻まうが僻むまいが、事実は事実ですからね。然しそりや何うでも可いんです。もともと無能に生れ付いたのが悪いんだから、いくら軽蔑されたつて仕方がありますまい。誰を恨む訳にも行かないのでせう。けれども世間からのべつにさう取り扱はれ付けて来た人間の心持を、あなたは御承知ですか」（八十五、286）

しかし、お延はこうした小林に「丸つ切り同情の起り得ない相手の心持」で、「それが自分に何の関係があらう」（八十五、286）と思うだけです。「彼女は小林のために想像の翼さへ伸ばして遣る気にならなかつた」といった人物として描かれるのです。小林はここで、自分が「わざわざ人の厭がるやうな事を云つたり為たりするんです。左うでもしなければ苦しくつて堪らないんです。生きてゐられないんです。僕の存在を人に認めさせる事が出来ないんで



す。僕は無能です。幾ら人に軽蔑されても存分讐討が出来ないんです。(略)」(八十五、286)

小林が、人に嫌われるような言動をするのは、「存在を認め」てもらったためでした。そして、そのようになった理由は「無能」だからとしています。小林は「叔父の雑誌の編集をしたり、校正をしたり、其間には自分の原稿を書いて、金を呉れさうな所へ方々持って廻つたりして、始終忙がしさうに見えた」(三十六、114)人物でした。おそらく編集・校正の仕事アルバイトにしているもの書き、が小林の仕事でしょう。小林を待っている仕事も朝鮮の「或新聞社」(三十六、114)でした。

冷ややかなお延に対して小林は話します。

「けれども奥さんはたゞ僕を厭な奴だと思ふ丈で、何故僕がこんな厭な奴になつたのか、其原因を御承知ない。だから僕が一寸其所を説明し上げたのです。(略)」(八十五、287)

小林は明らかに、津田やお延などの中産階級の人々による無視に抗議しています。それは、「無能に生まれ付いた」のが原因と言うのだから、「無能」といわれる(自覚される)人への社会的無関心に対する糾弾でもあるのでしょう。津田はお金や女性のことと家族や奥さんと葛藤しますが、それでも自分には「人間がない」と叫ぶ小林にしてみれば、それこそ贅沢な悩みでしかないのでしょう。

国が戦争している時でも中産階級は普通に暮らしていたことを『明暗』は視かせてくれています。もちろん次の戦争では「国民総動員」時代になるのですから、そういう意味ではまだのどかな時代だったといえるでしょう。そうしたとき、日本の中ではそれまでに獲得した植民地へひっそりと移動していくことを余儀なくされた人々がいたのであり、そうした背景には経済の問題があったのです。

そしてお延も津田も、そうした小林の悲痛な声に耳を傾けることはありません。お延にはこうした小林の告白は「一には理解が起こらな」いことで、「二には同情が出な」いことでしかありません。そして「彼の真面目さが疑がはれ」るのみで、「彼女を不安にする丈」だったのです。(八十六、288)

## 5. 恐怖・排除・不安

小林が朝鮮へ流れていくもうひとつの理由として潜在「社会主義者」的要素があります。

彼は「探偵に跟つけられ」(八十一、270)ている人物です。彼は「探偵につけられるのが自慢らし」いが、「大方社会主義者として目指されてあるのだらうという説明迄して聴かせた」(八十一、270)ほどの自覚も持っています。しかし、そうした話はお延にとっては「気の弱い女に衝撃を与えるような部分があった」ような話でしかありません。「怖怖ながら其所に釣り込まれて大切な時間を度外に置いた」とあるように、恐怖を与えられることでしかないのです。そうした恐怖に、数年までの大逆事件の記憶が生きていなかったとは限らないでしょう。言うまでもなく、大逆事件は「天皇」殺害の陰謀を企てたとして「社会主義者と名指された」人々を日本社会から消去することで排除した事件であります。

つまり、『明暗』は、日本社会の中で分断され、排除されつつあった人々を小林と言う人物を登場させることで認識させ、しかもそうした人々に無関心で、冷淡な人々を描いている作品とも言えます。

お延は小林にお金をあげようとする津田に不満を持ちますが、津田は「お延の貰つてきた小切手の中から、其幾分を割い毫毫毫朝鮮行の贖として小林に贈る事にし」ます。(百五十二、537)

不服なお延に、津田は、小林に同情すべきとしながら次のように話します。

「成程あいつは仕様のない奴さ。仕様のない奴には違ないけれども、彼奴が斯うなつた因りをよく考へて見ると、何でもないんだ。たゞ不平だからだ。ぢや何故不平だといふと、金が取れないからだ。所が彼奴は愚図でもなし、馬鹿でもなし、相当な頭を持つてるんだからね。不幸にして正則の教育を受けなかつたために、あゝなつたと思うと、そりや気の毒になるよ。つまり彼奴が悪いんぢやない境遇が悪いんだと考へさへすれば夫迄さ。要するに不幸な人なんだ」(百五十二、538)

と。しかも、そのあと、このように付け加えます。

「それにまだ斯ういふ事も考へなければならな

いよ。あゝ自暴棄になつてる人間に逆らふと何をするか解らないんだ。(略) だから今もしおれが彼奴の要求を跳ね付けるとすると、彼奴は怒るよ。たゞ怒る丈なら可いが、屹度何かするよ。復讐を遣るに極つてるよ。所が此方には世間体があり、向ふにやそんなものが丸でないんだから、いざとなると敵ひつこないんだ。解つたかね」(百五十二、539)

そして「一日も早く朝鮮へ立つて貰ふのが上策なんだ。でないとは何時何んな目に逢ふか解つたもんぢやない」とするのです。

小林への気持ちが追放に近い気持ちであるのは確かです。しかもそれは軽蔑から恐怖に変わっています。できれば日本を離れたくないと言うのが小林の本心でしたが、そうした気持ちが汲み取られることはないのです。

その理由は、教育や家や人を持たないゆえにもつことになった、つまり自らの境遇に対する「不平」でした。そうした不平に対する恐怖、貧しい階層に対する無関心は、まさにその無関心によって復讐されるのでは、といった恐怖に変わるのです。

それは、小林と一緒に出会った原に対して「短銃を出す」(百六十三、585)のではないかという「変な妄想」を引き起こさせたのと通ずる気持ちと言えるでしょう。誰もが持っている未知のものへの不安なのです。そこで出されたのは「一通の手紙」(百六十三、586)でしたが、それとて、未知の世界の話であるという意味では、依然として津田には「恐怖」の存在でしかありません。それは、それを持ってきた青年が「階級なり、思想なり、職業なり、服装なり、種々な点に於て随分な距離があつた」(百六十二、578)ゆえの恐怖でもあります。それは、小林が「相手が身分も地位も財産も一定の職業もない僕だといふ事が、聡明な君を煩はしてゐる」と指摘する通りなのです。(百五十八、561)

ここに出てくる原の手紙は、将来の小林の姿とも言えるでしょう。

そして、津田は「この手紙程縁の遠いものはない」としながらも、すこし影響を受けるようにも見えます。

「何処かでおやと思つた。今迄前の方ばかり眺

めて、此所に世の中があるのだと極めて掛つた彼は、急に後を振り返らせられた。さうして自分と反対な存在を注視すべく立ち留まつた。するとあゝあゝ是も人間だといふ心持が、今日迄まだ会つた事もない幽霊のやうなものを見詰めるうちに起つた。極めて縁の遠いものは却つて縁の近いものだつたといふ事実が彼の眼前に現はれた。」(百六十五、590 - 591)

そして小林は「凡て君には無関係」としながら「君の道德観をもう少し大きくして眺めたら何うだい」と促します。(百六十五、593)すると「不安が起こる」だろうと。

しかし津田は、「意地にも小林如きものの思想なり議論なりを、切つて棄てなければならなかつた。一人になつた彼は、電車の中ですぐ温泉場の様子などを想像に描き始めた」と書かれます。(百六十七、600)

このあと、津田が小林を引き止めたかどうか、『明暗』は書かずに終わってしまいました。しかし、おそらく津田やお延た小林を引き止めるような行動を取るべき根拠は少なくとも現在の『明暗』の中にはありません。

津田は「家を一軒持つて」(百五、359)いて、居場所を確保しています。そういう意味では居場所を持たない小林の不安を理解することはないのでしょうか。津田は自分の身体・健康への不安を抱え、お延は「何うぞ、あたしを安心させて下さい。助けると思つて安心させて下さい。貴方以外にあたしは憑り掛り所のない女なんですから。あなたに外されると、あたしはそれぎり倒れてしまはなければならぬ心細い女なんですから。だから何うぞ安心しろと云つて下さい。たつた一口で可いから安心しろと云つて下さい」(百四十九、527)と訴えるほどに、夫との〈関係〉に対する不安を抱えています。

お延の「不安」は心の問題で、津田の不安は身体的な問題です。そして居場所を失つた小林の不安はその両方を合わせたものといえるでしょう。しかし小林の不安に共鳴することのついにない、定住者たちの不安を、『明暗』は描いて、追われていくものたちの不安を描いている小説といえるのです。